

Title	原静著 銀行実務誌
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.883(143)- 884(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

場が下落しても小賣相場の下落せざる根本の原因を挙げ對策としては同業組合の解散進んでは重要物品の最高價格公定を提唱し、政府及び公團體の無策を難じて消費者の自助手段を勧めて居り(第九章)、近時地主と小作人との間に於ける爭議頻發の原因は經濟上及び思想上に於ける時勢の變に基づくことが少くないが結局は政府の誤れる經濟政策に因由すとなし、爭議の爲めに農業衰頹の機を特に速かならしめざらむが爲めに米價の平衡と地主小作人間の分配公正とを計り進んで一部土地の國有を斷行することが必要であると説く(第十章)。

以上記す所は素より本書の内容の一部を極めて、at random に摘記したものに過ぎないのであつて、是等の結論だけを見るときは著者の眞意を捕捉すること能はざるの虞れがあり、従つて是等の點に關しては世間或は多少の異論なきを保し難きものもあらうが、著者が如何にして斯る結論に達したかの筋道並にその結論の當否

に關しては親しく本書を讀む者に於て自から首肯せらるゝ所があらうと思ふ。同一の論旨が諸所に於て繰り返されて居り内容は必ずしも秩序整然たるものではないが、これは大體に於て論文集たるの性質上免れざる所であるとしなければならぬ、加ふるに此の點は、特に世界の經濟に關する諸章に於て金融及び通貨の方面に關する著者年來の蘊蓄に加ふるに戰時戰後の事情に關する最近までの該博精緻なる研究の收穫を以てして居るが爲にその内容を充分に消化し切れぬといふ感を懐かせるほどに豊富であり、従て所論もそれだけ堅實の度を増して居るの一事によつて充分に償はれるであらう。若しそれ日本本の經濟に關する諸章に至つては研究といふよりも時論といふべきものであるだけに(個々の論點に就ては世間或は異論があり得るかも知れないが然し)文章に熱があり筆も一層自由に運ばれて居つてその筆致人を魅するものがある。世間では著者を以て近年甚しく左傾したと噂し

て居る者もあるやうであるがその所説は決して偏見に充され一部階級の利益を辯護主張する偏頗な議論に類することなく、身を高所に置き經世的見地から觀察論斷せられて居るのであつて、唯その間に、國威國力の發揚よりも國民福利の増進を以て一層重しとするの見地が窺はれ、その所信を展ぶるに端的にして苟もその見以て非なりとする所のものを難するに際しては筆端頗る辛辣銳利なるものがあることが人の眼を惹くのみ。對外商業政策上に現はれたる著者往年の經濟政策的立場たる自由主義は、著者近年の經濟上社會上の論議の傾向から見れば恰かも弊履の如く棄て去られたかの如くに感せしめらるゝも、その必ずしも然らずして米の國際的商品化を説かるゝが如きは、窮屈なる一個の主義に束縛せられずして頗る自由なる立場に身を置かるゝに到りし所以と解すべきであらう。往年は自由貿易を辯護するに、戰時食糧品の供給は強力なる海軍によつて後援確保せらるべしと

いふを以てし海軍擴張論者たるの立場に在りし著者をして、同じく主要食糧品に就て外國に依頼せよと論じつゝ、今や却て軍備の縮少を説くを得しむるもの、是れ時勢の變と云ふべきか。終りに、本書に屢々散見する誤植をば再版に際し更に嚴密に校正するの勞を惜まれざらむとを希して紹介の筆を擱く。妄言多罪。(増井幸雄)

原靜氏 銀行實務誌

菊版九〇六頁同文館發行  
定價六圓三十錢

本書の著者原靜氏は明治四十年我大學部を卒業して、直に三井銀行に入り、同行に勤務すること、十數年に及べり。氏が在塾中、學生として優秀の成績を示したるのみならず、研究心の極めて旺盛なりしことは、今日尙は余の記憶に存する所なるが、銀行の實務に鞅掌して、之を研究し又改善せんとする氏の志業は遂に氏をし

て表題の如き大著作を完成せしめたるもの、如し。一書殊に千頁に近き著述を成すが如き、平生學窓に居り、文筆に親む者の尙は容易とする所に非ず、原氏が簿記算勘の傍、之を成就したるの一事は先づ余の敬服する所なり。

本書編を分つこと五、第一編手形第二編銀行の性質第三編銀行の業務、第四編銀行事務取扱手續第五編銀行簿記等なり。是等の内第二編は銀行に關する普通の著書に於て、常に見る所なるが、他の四編に至つては、總て實務家に非ざれば、取扱い難き幾多の問題を經濟、法律並に實務の三方面より詳論し、細説して、殆ど餘地あるを示さず。各種の書式並に記帳の様式も亦説明を補う爲めに掲げらる。第四編銀行事務取扱手續に關する説明中商品擔保の項に於て、預證券並に質入證券に就て我國の制度を論評したる邊りは實務家の立場より出でたる議論として、傾聴に値するものとす。

余は從來學生より邦語の銀行實務書に就て、

質問を受け、答辯に窮したるが、今原氏の著者を得て、多年の喝を醫するを得たり。銀行業の實務を知らんとする者には勿論、銀行業の研究者に一讀を薦む。(堀江歸一)

加田哲二著 「國家學說と社會思想」

四六版五五〇頁

定價 參圓

下出書店發行

國家とは何ぞや。マルクス(Karl Marx)に従へば、近代的國家は「全有産階級の共同の事務を處理する委員會」である。ガアナ(J. W. Garner)に従へば、「政治學及憲法の概念としての國家(The State)は、一定の領土を永久的に占有し、外部的支配を受けず、且組織せられた政府——其れに其住民の大部分が傳統的服従を爲す——を有する所の多數の人々(多少の差はあれ)の團體(Community)である」也。

近來我國に於ても、一般に、國家の概念に關

して、眞面目に研究を爲し又は何等かの説を成すものが、殖えて來たと云ふことである。また之に關して發表せらるゝ論文も多いやうに思はれる。これは一には、他の理由もあるが、官憲が單なる杞憂を棄て、斯る問題を取扱ふ者に對する態度を更めたこと云ふことにも因るであらう。然しながら、ポオル・ルロア・ポアリユの述べてあるやうに、『現代人の間に普通行はるゝ國家の概念、其性質其機能についての概念は極めて混亂してゐる』のである。又其定義に關しても『獨逸の著作者シュルツ(Schulze)の云つたやうに、國家の定義は、殆んど如何なる著者も其れ自身の説を持ち、二つの似寄つたものも殆んどない位無數である。』(Garner)何となれば『國家の起源、性質、機能についての問題は一見極めて容易のやうであるが、それは最も難解な問題の一つである』からである。

此に私が敢て江湖に推奨したいと思ふものは、加田哲二氏の近業『國家學說と社會思想』で

ある。此著は、近代的思潮の流に従つて棹さす人にとつても又逆つて進まうとする者にとつても——思想上の新傾向を啓示する點に於て——好參考書たるを失はぬと愚考するからである。本書は氏が最近數年に涉つて諸種の雜誌等に寄稿せられたものを集録したものであるから終始系統的に起草せられたものではないが、併し單なる斷片ではない。後に述ぶるやうに大體或問題を中心として筆をとられたものである。内容を分つて四篇とする。第一篇はマルクス主義の國家觀、第二篇はギルド社會主義とその國家觀、第三篇は無政府主義の諸問題、第四篇は現代經濟生活の批判と想し、各篇とも數節に分たれてゐる。

本書の表題よりして推則すれば、右四篇中第一篇と第二篇とは最も重きを爲してゐるやうに思はれるであらう。事實此兩篇は頁の大部分を占め、重要な節を含んでゐる。序文に代へたる一篇を通讀して國家觀上の新傾向を知り而し